

春の色、春の想い

— 『ひまわり』とハーンの嵩山伝説 —

牧野陽子

昔、ヨーロッパで暮らしていたころ、春の到来を告げたのは庭のクロッカスや黄水仙、野の金鳳花、そして道端の連翹や針エニシダの花だった。黄色の可憐な花々が復活した太陽の陽ざしを浴びて、きらきらと光る。春とは黄金色の輝きとして鮮やかに目に入ってくるものなのだ、と感じたことを覚えている。

そして町から小一時間ほど車で走ったところは、夏には一面のひまわり畑となった。早春の黄色い花が若い太陽に呼応した青春の季節の象徴だとすれば、地平線の彼方まで黄金にうねるひまわり畑の景観は、まさにその春の生命力の極まりのごとく思えて一層眩かった。

春の野にあふれる金鳳花の花、初夏に稔りの収穫期を迎える麦畑、そして夏のひまわり畑。視界に広がるのはいずれも黄金色の海である。春からそのまま夏へと、梅雨という断絶のない風土では、季節は強さと深さを増していく一つの色彩の印象において連続しているように思えた。

ところで、映画『ひまわり』（ヴィットリオ・デ・シーカ監督、一九七〇年、イタリア）は、風にそよぐウクライナ地方のひまわり畑の色鮮やかな景色が印象的な作品である。話は、第2次世界大戦中のイタリア。新婚間もない夫はロシア戦線へと送られたまま消息不明となる。戦死を信じない妻は何年もの間、待ち続け、ついに夫を探しに行く。やがて夫はウクライナの

片田舎でみつかるが、現地の娘と結婚し、子までなしていた…。映画の題名、ひまわりの風景はタイトルとエンディング双方で背景に使われているが、物語の中で映し出されるのは一度しかない。いまや髪に白いものが混じる中年の妻が、夫らしき人がいるという所へ向かう、その場面である。この時、彼女が目にし、彼女を取り囲む夏の黄金の原野は、彼女の高まる想いそのものと重なっている。若き日の恋、待ち続けた日々。ソフィア・ローレン演じる強く一途な性格の妻が貫き通した心を花に託せば、それは春の花ではそぐわず、烈しさを秘めた夏のひまわりでなければなるまい。

映画では、だが、再会の現実と無言の別れ、さらにその後の経緯と、戦争をはさんだ十数年間の男と女の運命が描かれていく。ただ、この物語の根底にあるのが、帰らぬ人を待つ女という古典的モチーフであり、また青春の想いに生き続ける者と現実に順応して変わっていく者の対比であることも指摘できよう。

似た話は、古今東西、多々あるだろう。

たとえば民話伝説ならば、よく知られた唐津の松浦佐用(小夜)姫の物語がある。

はるか昔、大伴狭手彦が帝の使いで朝鮮へ渡ることになった。遠征の日、佐用姫は狭手彦の船を見送り、山の頂から沖合に向かっていつまでも領巾ひれを振り続け、待つうちに悲しみのあまり石と化してしまった。それで、その山を領巾振山といい、そこに佐用姫岩が今もある…。

古くは『万葉集』『肥前国風土記』などに記され、中世の歌学書や説話集、近世の随筆にまで広く語り継がれた物語である。ただ、元々の古代の文献の記述には領巾振りの悲話があるだけで、石と化す部分は後に中国の望夫山伝説の影響で加わったとされている。その望夫山また望夫石の謂われとは、戦のために遠い国へ赴く夫を、妻は武昌の北の山まで送っていった。帰らぬ夫。妻は立った姿のまま石になった、というもので、鎌倉時代の『十訓抄』と『古今著聞集』がこの故事を載せた時、日本の話として松

春の色、春の想い

浦佐用姫の領巾振山伝説を併記した。これ以後、二つの伝説が結びついていった、というのが定説らしい。

待ち続けて“石”と化す。そこには、たとえば『国性爺合戦』の中の別れの場面で、出陣する和藤内の船を追って岩に駆け上った小睦が、「唐土の望夫山、わが朝の領巾振る山、今のわが身のわが思ひ、石ともなれ、山ともなれ、動かじ去らじ。」と泣き崩れる台詞にも表れているように、大陸的な、ともいうべき感情の烈しさが見られる。

とはいえ、哀れだ。女は呪いをかけられたわけでもなく、ただ待ち続けて自ら石と化したのである。一途さが報われない点では映画の『ひまわり』と同じだが、悲しみの質が異なる。ここでは、娘は想いを行動に移して現実を突き止めることはない。生きて異国で所帯をもったかもしれぬ男の存在は視界から消えて、石という無言の無機的な物体と化した女の姿だけが照らし出される。そしてそれは、若き日の幻に囚われて外界の現実と断絶し、自らの内に硬く殻を閉ざすようになった人間の姿のようにもみえる。

石化する佐用姫の物語は唐津の領巾振山周辺を舞台とするものである¹⁾。だが興味深いことに、きわめて似た話が、松江近郊の^{だけ}嵩山の伝説として、ラフカディオ・ハーン の作品に登場する。

「阿弥陀寺の比丘尼」“The Nun of The Temple of Amida” (『心』 *Kokoro: Hints and Echoes of Japanese Inner Life*, 一八九六年, 所収) という短編の冒頭部分なのだが、ハーンは物語をこう語り始める。

年若いお豊は、都に上った夫の無事帰還を願って毎日蔭膳を据え、暖かい季節になると、幼い子供の手を引いて、嵩山に登った。頂上には、待ち

1) 周知のように、東北など各地に松浦佐用姫が登場する「掃部（かもん）長者」と呼ばれる話があるが、佐用姫が池の大蛇に生贄に供される人柱伝説で、望夫石の要素はない。『肥前風土記』に記された蛇婿入りの話の部分が転化して伝わったものとされている。(柳田国男「人柱と松浦佐用媛」『妹の力』ほか、事典類にもその生成伝播について記載されている)。

こがれて岩と化した昔の姫を祀るお宮があり、大切な人の帰りを待つ者はみなこの山にお参りして祈るからだ、と。やがて、夫の死の知らせが届き、続いて子供が病で急死する。そしてお豊は少しずつ狂っていく。小さな物ばかりを好み、あどけない子供ようになっていくのである。その後、小さな寺を建ててもらい、その境内で近所の子供たちと毎日遊ぶのを喜びとするようになったお豊は、死んで境内の一角に葬られた後もなお、阿弥陀寺の比丘尼として慕われ続けた、という話である²⁾。

嵩山伝説は、物語りの背景をなすだけではなく、重要な伏線になっている。お豊が子供に退化し、一種の聖性を帯びた存在として人々に慕われ続けたことは、いわば嵩山の姫が“石”と化して後に祀られ、参詣の人々がたえないことと重なりあうからだ。だが印象的なのは、冒頭でハーンが記す嵩山登りの様子と、広々とした山頂からの光景だろう。ハーンは次のように嵩山の伝説を読む者の脳裏に刻みこむ。

晴天の続く季節になると、お豊は子供を負ぶって、嵩山に登ることもあった。こうした行楽を子供はとて喜んだ。母が何やかや見せてくれるだけではなく、面白いことを色々と聞かせてくれたからである。登る道は木立や森の中を抜け、草原を通り過ぎ、奇岩の間をめぐってゆく。物語を秘めた花が咲き乱れ、木の精を宿した樹木がそびえている。鳩がコルツ、コルツと啼き、小鳩がオワオ、オワオと悲しげな声を出す。時にざわつくような、あるいは笛をふき、鈴を鳴らすような、蝉の合唱もあった。

待つ人を心に持っている者はみな、都合さえつけば、嵩山詣でをする。この山は市内のどこからも見えるし、逆に頂きに登れば、遙か何カ国も見渡すことができる。その頂上には人の丈ほどの、形まで人に

2) この作品の解釈については、拙著『ラフカディオ・ハーン—異文化体験の果てに』(中公新書、一九九一年)参照。

春の色、春の想い

似た石がまっすぐに立っていて、その前にも上にも、小石がたくさん積まれている。そしてそのそばに、小さなお宮があつて、遠い世のある姫君を祀っている。この姫は、愛しい人との長い別離を悲しんで、しばしばこの山頂でその帰り来るのを待ちわびていたが、傷心のあまり石と化してしまった。それ故人々はここにお宮を作り、今もお愛する人を待つものはここへ登って、無事帰り来ることを祈るのである。³⁾

春から夏にかけての美しい季節に、花々が咲き乱れる野原とすずやかな木立の中をぬけ、小鳥のさえずりを聞きながら嵩山に登る。子供にとってもそれは心躍る発見に満ちた楽しい道のりだ。そして、頂上につくと、一気に視界が広がり、遠くの国々まで見渡せる。帰りは、月明かりのなか、お豊は子供に「出雲の童歌をやさしく歌って聞かせ」、「藍を流したような夜空に向けて、果てしなく続く水田から、大地そのものの声かと紛う湧き立つようなやさしい蛙の合唱がたちのぼるのであった」、とハーンは続ける。

望夫石伝説は元々、山の峠や海辺の岸壁など、地理的な境界の地を舞台とする。遠い異国へ渡った人を思って、立ち尽くす姿のまま石となるのは、その境界を越えることができないからだ。だがハーンは、山頂という地理的境界に至った時に得られる広々とした眺めを、その空間の広がりと開放感をここに描くのである。母と子が連れ立って嵩山に登る道も、帰りの道も、春から初夏の牧歌的な自然の美しさに包まれている。嵩山詣での一節をやわらかな季節の光のなかに描き、「すべて幸せな時であった」とハーンが結ぶのは、その後の展開との対比を際立たせるためという意味もあるかもしれない。しかし、お豊の運命は嵩山の姫と重なりつつ、その一方で

3) 仙北谷晃一訳「阿弥陀寺の比丘尼」『小泉八雲名作選集 日本のこころ』講談社学術文庫、一九九〇年、一二〇頁。

阿弥陀寺の境内には子供の笑い声歌声がたえず聞こえ、花が咲き、小さな動物も、小鳥もすみついた。嵩山詣の通りの幸せな記憶が形をかえて再現されているともいえるのである。

このように、「阿弥陀寺の比丘尼」では、嵩山の伝説とお豊の物語が照射しあう。嵩山詣を語るなかで記される伝説そのものも、それゆえ大陸の望夫山伝説や唐津の佐用姫伝説とは異なる優しさに包まれているように思われる。

ただ、嵩山にこのような伝説が実際にあった(そしてそれを聞き知ったハーンが作品に書いた)のかどうかは、実ははっきりしない。

もちろん、唐津と同じく日本海に面して、さほど遠くない松江に、望夫山伝説や松浦佐用姫伝説が伝わって根付いていたとしても不思議ではない。嵩山は、松江市の郊外にあり、標高三三一メートルながら、山頂からは東に中海と大山の秀峰、南は中国山地、西に宍道湖と松江街地、遠く日本海まで眺望が広がる。ハーンの語る伝説にいかにも相応しい立地ではある。ただ、ハーン以前の文献に嵩山伝説について言及した例はほとんど知られていない。

近年発見された幕末のある旅日記には、小村和四郎重義という出雲の人が慶応二年(一八六六)の二月から六月にかけて『出雲風土記』ゆかりの神社を巡拝した様子が書かれている(関和彦『古代出雲への旅～幕末の旅日記から原風景を読む』)。和四郎は嵩山にも上り、山頂の布自伎弥(ふじきみ)の社に参拝し、神社の縁起についても詳しく記したが、伝説への言及はない。天気が良く、頂上の平場から見晴るかす四方の眺めの素晴らしさに「絵巻そのもの」だと感嘆した。藩主の展望見張台もあり、そこに昔、狼煙をあげる「烽(とぶひ)」が置かれていたことにも納得した。そして、松江方面からの大勢の参拝客がきており、口々に景色をめでていたのだという⁴⁾。このような記述を読むと、嵩山の頂上に祀られた石とその傍のお宮は、いわゆる石神、つまり柳田国男が指摘したような、集落の境界にあっ

春の色，春の想い

て邪の侵入から“里”を守る“さへの神”としての性格を持つものだったと考えるのが自然ではないかと思える。

ハーンもまた、松江で暮らした一年半の間に、嵩山に上ることがあったにちがいない。そして、同じように、山上からの展望に感嘆した。そして、ハーンはその後、熊本へ赴任し、博多にも旅行をしている。そのおりに、唐津の佐用姫伝説を耳にして心に刻んだのだろう。「阿弥陀寺の比丘尼」が書かれたのはそのさらに数年後のことだから、嵩山伝説は、あるいはハーンの手記挿入と考えていいのかもしれない。

ハーンの手記嵩山伝説を読んで人が想い浮かべるのは、里を守るための防衛的な境界領域や、国境の峠で嘆き悲しむ女の様子というよりは、むしろ山の頂において、海の彼方、山の彼方を見つめて静かに立つ人間の後姿だろう。すると、いつしかその後姿と視線に気持ちは一体化し、遠くの海原や山並みの景色が脳裏に広がっていく。ここでは、旅立った昔日の人への想いは、異郷という別世界への果たせぬ憧憬の念に結びついている。

ハーンは来日前、アメリカのニューオーリンズで新米の新聞記者だったころ、ボードレルの詩をめぐる「春の幻影」というエッセイのなかで、「決して行けない国に対する捉えどころのない郷愁や、一生会えない人へのはかない想いは、おそらく特殊な季節の夢なのだろう」と語っている。見果てぬ国や、見果てぬ人への想いは、いわば“春”という人生の季節に特有の感情だという。

そのハーンは、四十の歳で未知の国日本に来て、最後まで異国日本の民俗と文化を理解しようと力をそそいだ。ハーンが松江の嵩山に付した伝説は、望夫山伝説とも唐津の伝説とも趣が異なる。遠くやわからかな、まるで春の霞で包まれているような印象が残るのである。

4) 関和彦『古代出雲への旅 幕末の旅日記から原風景を読む』（中公新書）二〇〇五年、六〇-六四頁。

（註：本稿は、「春の色，春の想い―「ひまわり」、望夫山と小泉八雲の高山伝説」（『成城教育』123号，2004年（平成16年）3月号）を大幅に加筆訂正したものである。）